

「ターミナルケア医学」

聖路加看護大学学長 日野原 重 明 監修
 日本大学教授・第1内科 岡 安 大 仁 編集
 淀川キリスト教病院副院長 柏 木 哲 夫

東京大学教授

森 岡 恭 彦

平和な世が続く、福祉が充実してくるにつれて、安らかに死にたいとの希求が人々の心に起こり、またわが国でも、不治の患者についてのケアの問題がクローズアップされてきている。

古くより医師は患者を治すことに熱中し、1日でも生命を延長することを至上主義としてきたきらいがある。しかし、一方において現実には近代医学をしても如何ともし難い患者があり、このような患者に対しては無益な延命治療に終始するよりも別のことを考えてやるべきであるとの考えが強調されてきているわけである。すなわち、限られた最後の人生を苦痛の少ない、充実したものにしてあげるほうがより良いのではないかということである。医師は何が何でも延命に努力すべきであるという態度を放棄する。そして、患者に

残された日々を安らかに過ごさせるように配慮する。

そうなると、まず医師は患者の延命ではなく苦痛をとるための治療手段を考え、そして患者の生活の質を重視し患者の心を重視したケアを考える。そうしてはじめて医術といった医師が本来具備しているものと異なった領域に踏み込むことにもなる。医師もそのような領域の知識をも学ばねばならないことは当然であるが、その領域は、哲学、宗教、心理学といった極めて広範囲なものとなり、結局は、看護婦をはじめとする医療従事者や家族、ときには宗教家などにも協力してもらうことが必要となってくる。

本書は、医師のみならずこのような人達をも対象にして書かれた解説書である。近年、こういったターミナルケアに関する書は既に多く刊行

されているが、このような問題は医療技術を除き、精神的な面になると内容が多岐にわたり、またその複雑さから、特に初心者には具体的問題としてとらえることが難しい。特に、患者には1人1人個性があり、また症状も異なっており、対応が難しいわけである。

本書は「ターミナルケアの基本的な考え方」と「苦痛軽減のための症状のコントロール」の二部に分かれており、第一部ではその思想的背景、看護の実際、告知の問題、死についての教育、在宅ケア、ホスピス活動などについて書かれ、第二部は主に医学的な内容となっている。

記述は簡明でよく整理されており、多くの適切な執筆者が分担し、あらゆる問題が解説されており、この方面に関心を持つ医師や看護婦、コメディカルの人々や一般の人々によく理解できるように配慮されており、これらの人々の入門書として推奨しうる。

人間の科学には限界があり、人は必ず死への道をたどるわけで、人生最後の日々をどう過ごすかという問題を避けて通ることはできない。本書を通読してまず問題意識を持っていただけでは幸甚である。

A5判 226頁 図10 1989

定価 2,060円(税込) 円 300

医学書院 刊